

自然の声を聴く ——環境人文学、人類学、エミリー・ディキンソン

関根 全宏^{†1}

(令和3年12月4日査読受理日)

Voices of Nature as Others: Environmental Humanities, Anthropology, and Emily Dickinson

SEKINE, Masahiro^{†1}

(Accepted for publication 4 December, 2021)

要約

本稿の目的は、19世紀アメリカの詩人エミリー・ディキンソン (Emily Dickinson 1830-86) の自然詩を、環境人文学の枠組みから再読することで、自然と人間の関係を学際的に問い直す意義について考察することである。ディキンソンの一連の自然詩は、とりわけ、詩人の信仰の問題や死のテーマと深く関わるものとして読まれることが多いが、「環境」という観点を基軸として分野横断的に学際的な視点から再読を試みると、どのような新たな視点を獲得することができ、いかなる読み直しが可能となるのか。この問いを念頭におき、人間中心主義を相対化するような自然観が、「他者」としての自然の〈声〉の表象に認められることを確認しつつ、最終的には、文学に表象された自然と人類学 (アニミズム) との接点に触れ、環境人文学の発展的課題を探ってみたい。

Abstract

The purpose of this paper is to re-examine the nature poetry of the 19th century American poet Emily Dickinson (1830-86) within the framework of environmental humanities. In doing so, I would like to consider the significance of reexamining the relationship between humans and nature from an interdisciplinary perspective. A series of Dickinson's nature poems are often read as deeply related to issues of death and the poet's faith, but how can we acquire new perspectives and how can we reread it if we approach them again from a cross-disciplinary perspective with the "environment" as the axis? With this in mind, in the ultimate goal, I would like to consider ongoing issues of environmental humanities, touching on the point of intersection between nature represented in literature and anthropology (animism), while observing that the perception of nature that relativizes anthropocentrism can be seen in the representation of the voice of nature as the "other."

キーワード: アメリカ文学, エミリー・ディキンソン, 環境人文学, エコクリティシズム, 人類学

Key words: American Literature, Emily Dickinson, Environmental Humanities, Ecological Criticism, Anthropology

1. はじめに

「環境人文学」という学問的潮流は、20世紀後半から、文学、人類学、歴史学、教育学、言語学、哲学などの人文科学系諸分野を「環境」という視点から分野横断的に再構築しようとする動きとして生じた。その動きは、オーストラリア、北米、北欧を中心に起こり、2010年以降には日本にも広がりを見せ、この10年の間には示唆に富む多くの論考もまとめられてきている。とはいえ、人文諸学の分野を見渡してみると、今後ますます学際的に発展する余地が大いにあるように思われる。

本稿では、まずは議論の枠組みとして、これまでの環境人文学をめぐる主要な研究成果の足跡を辿りながら、その動向と学術的特徴を概観し整理する。その上で、環境人文学の一翼を担う環境文学という文学ジャンルや、エコクリティシズムという文学批評が提起する自然の「他者性」の問題に焦点を当てたい。それは、「他者」が、自然と人間の関係について考える上で最重要概念だからである。それゆえ本稿では、「他者」を鍵概念として文学と人類学の接点

を探り、両者がどのように自然の〈声〉に耳を傾けてきたのかを考察する。そして、この観点からエミリー・ディキンソンの一篇の自然詩を再読することで、「他者」としての自然の〈声〉の表象に人間中心主義を相対化する詩人の特異な眼差しを浮かび上がらせ、最終的に、人類学 (アニミズム) の観点から新たな解釈を付け加えることが本稿の究極目的である。

2. 環境人文学——〈環境〉という視座

2014年に出版された『文学から環境を考える エコクリティシズムガイドブック』には、環境文学 (自然環境と人間との関係を主題とする文学) 関連の学術用語やトピックがまとめられているが、そこに収められている「環境人文学」の項目に拠れば、環境人文学は「人文科学の分野から、人間と環境の関係、および、自然観や環境をめぐる価値観、倫理観を形成してきた文化的、哲学的枠組みを探る研究の総称」と解説されている。そして、その特徴は「人間の文化・社会と自然を相互に影響し作用し合うものと捉える視

^{†1} 東京家政大学人文学部英語コミュニケーション学科

座から従来の問いの立て方と方法論を見直しつつ、人文学諸領域を横断するような学際的アプローチ」にある（豊里 275）。たとえば、哲学と人類学との対話から環境思想が、歴史学と考古学から環境史が、文学研究と歴史学からエコクリティシズム／環境批評が生まれたとされているように、環境人文学は、環境と人間の関係を基軸に、人文諸学の様々な研究が分野を横断して共同する形で学際的に再編される一つの大きな動きである¹⁾。

「環境人文学」という用語が使用され始めたのは 2000 年代のことだが、それ以前から、1970 年代の環境哲学、1980 年代の環境史、1990 年代のエコクリティシズムなどの領域において、人間と人間を取り巻く自然環境との関係をめぐる研究は既になされていた。その歴史と動向は、例えば、後述する環境人文学の二巻本の論集のうちの一つに収められている結城正美の論考「環境人文学の現在」が詳しく論じており、日本における環境人文学の萌芽が、1976 年に結成された「不知火海総合学術調査団」の実践にあるといったことも指摘されている²⁾。

とはいえ、環境人文学という学問領域が急速に発展してきたのは、特に近年のことである。その背景には、「地球規模の環境変化に対する危機意識とそれに基づく人間観再考の流れ」があり、環境問題が深刻化する中、「人間と環境の相互作用域における新たな人間観や倫理観」が求められているという時代の要請がある（豊里 275-76）。すなわち、環境人文学は、環境問題の解決を直接的、実戦的、あるいは政治的に指向するのではなく、むしろそうした問題に対する取り組みの基盤となるような「自然観」、「人間観」、「倫理観」といった、自然をめぐる観念、思想、理念を学際的に問い直すことを本質的な特徴としている。そして、それが実践の根拠となるのだ。

こうした価値観の見直しについて、とりわけ文学の領域からもう少し深く掘り下げて考えようとする際に、『フィールド科学の入口 文学の環境を探る』（2020 年）が有益な視点を提供してくれる好例の一つであろう。本書は、一見すると文学とは何の接点もないように思われるフィールドワークの領域から文学作品を読み直す刺激的な試みである。第一部（「環境人文学」とは）は、編者野田研一と赤坂憲雄による対談の記録であるが、日本における環境文学研究の第一人者である野田は、「人文諸学の交点」（8）としての環境人文学における文学の価値は、文学作品に記録された「なまなましい感受性とか感性とか感覚」にこそあると語る。文学は「人類が積み重ねてきた自然との関係の多様な表現をかなりダイレクトに保存している一次資料」であり、「感受性や感性などを生の情報として提示」し、それらを根拠にして、自然をめぐる価値観、観念、思想、理念を問い直すことにこそ文学の可能性がある（45；傍点強調引用者）。そしてこれは、環境人文学において文学が果たしうる役割の一つに他ならない。

このように、異なる分野が交差し対話をする環境人文学の論考が、2017 年に二巻本の論集——『環境人文学Ⅰ 文化のなかの自然』『環境人文学Ⅱ 他者としての自然』——に体系的にまとめられた意義は非常に大きい。「体系的に」とは言え、本論集の特徴はむしろ「多様性」にある。学術的な論考および作家（創作者）の鼎談や講演録なども本書には収められているが、〈自然と人間の関係〉を一貫したテーマに据え、人文諸学における異分野の領域を横断する形で、環境人文学が自然環境をどのように考えていくことができるのか、その可能性を多角的に提示している環境人文学の主要アンソロジーである。各論はいずれも深みのある論考だが、ここでは、第二巻の「はじめに」において簡

潔に、かつ鋭く提起されている以下の重大な問いに触れておきたい。

自然は人間にとって他者なのか。例えば動物は他者であるといえるのか。自己と他者との境界はどのような基準をもって引かれるのか。われわれの文明は他者が必要としているのか。他者とはいったい何者なのか。自然とは？そもそも、「われわれ」とは、いったい誰なのか？

本書に収められた各論考はこれらの問いを念頭においている。人文学にとって「他者としての自然」は、いかなる意義をもちうるのだろうか。（山本 i）

この一節における最重要概念は「他者」である。しかし、「他者」をめぐるこれらの問いに答えることは、決して容易なことではない。しかし、あるいはそれゆえ、常に問い続けていかなければいけない問いでもある。エコクリティシズムという文学批評や、自然をめぐるノンフィクション・エッセイであるネイチャーライティングが問い続けてきているのが、まさにこの、自然の「他者性」をめぐる問いであることは、ここで改めて強調しておいてもよいだろう。自然は、声も主体もない存在なのか。こう問うことが決して荒唐無稽ではないことは、一つの論考がはっきりと示してくれているが³⁾、次節ではディキンソンの詩における自然表象を再考するために、「他者」としての自然の〈声〉ないしは主体性について、文学と人類学の観点から考えてみたい。

3. エコクリティシズムと人類学——自然の〈声〉と他者

長い間、自然は沈黙する「他者」として考えられていた。しかし、自然をめぐる諸問題に視点をおくエコクリティシズムは、ある信念のもと、自然には主体性があり、〈声〉もあるということを明らかにすることで、自然環境と人間の関係について再考を促してきた。この分野の大家であるローレンス・ビュエルらは、エコクリティシズムが出発点としている信念をこう語っている——「想像力の産物である文学などの諸芸術およびその研究は、環境への配慮を深め、刺激し、方向づけるような言葉、物語、イメージの力をつかみ取るので、環境問題、つまり現在、地球に悪影響をもたらしている様々な形態の環境破壊を理解するうえで貢献できる」（ビュエル他 195）。

こうした信念を出発点とするエコクリティシズムや環境文学というジャンルは、環境人文学の柱として、1990 年代前半にまずはアメリカで台頭し、次第に日本においても広がっていった⁴⁾。それらが自然観の再考を促し、人間を取りまく自然にも〈声〉と主体があることを示してきたように、アニミズムも、人間以外の存在者に〈声〉を与えてきた。ここに、「他者」としての自然をめぐる文学と人類学の交点がある。

文学と人類学の対話の成果が恐らく初めてまとめられたのが、2016 年に出版された『鳥と人間をめぐる思考——環境文学と人類学の対話』である。本書は、文学に表象された自然を扱う環境文学と、民族誌として記録されてきた自然を扱う人類学による異分野間の対話の書であるが、その対話においても「他者」をめぐる問題意識が重要視されている。2021 年 9 月に出版された『モア・ザン・ヒューマン——マルチスピーシーズ人類学と環境人文学』も、サブタイトルに示されているように、マルチスピーシーズとい

う観点を基軸に、環境人文学の可能性を示す論考の一つとして注目に値する⁵⁾。

では、そもそも人類学とはどのような学問領域なのか。20 世紀イギリスの人類学者ティム・インゴルドは、その著書『人類学とは何か』において、人類学を「世界に入っていく、人々とともにする哲学」(9)と定義している。人類学が「背景や暮らしや環境や住む場所がどのようなものであるかを問わず、世界中に住まうすべての人の知恵と経験を、どのように生きるのかというこの問いに注ぎ込む」(7)研究分野であるならば、文学は言語化された作品世界で、「いかに生きるべきか」という同様の問いを提起する。文学作品の中には、異なる文化的・歴史的背景を抱える人が様々な場所を生きている。そしてそこには、その人々の、人間の営みがある。現実の世界か、言語化されたテキストの世界か——その違いこそあれ、また、方法論こそ異なるものの、人間の生の営みについて深く考えるという点においては、文学と人類学は軌を一にする。

では、人間以外の存在者に〈声〉を与えてきたアニミズムとはどのようなものなのだろうか。人類学に関する主要な概念を解説した『Lexicon 現代人類学』(2018 年)に拠れば、19 世紀イギリスの文化人類学の父と称されるエドワード・タイラーは、「人間以外の存在に魂や霊の存在を認めるような考え方」(38)をアニミズムと名づけた。だが、その土台には、人間だけが魂や精神をもつというデカルトの西洋二元論的思考があり、人間と非人間が別物であることを理論的前提としていた。つまりそこには、自然や超自然なるものに人間の精神や魂を投影するという人間中心主義的なプロセスが内包されていた。そして、そのプロセスは、エミリー・ディキンソンが生きた 19 世紀アメリカにおける主流な自然観を成立させる基盤でもあった。当時のアメリカの支配的言説は、自然は〈声〉をもたず、人間の精神の象徴であり、さらには神と人が一つになれる場であるというものだった。人間の魂や精神が、自然や超自然的なものに投影されてどこまでも遍く拡大することで、内面と外界との距離／境界が消滅し、〈私〉という自我があたかも神のように全てを見渡すことができると見做されていたのだ。

しかし、20 世紀のアニミズムは、デカルト的西洋二元論を脱却し、あらゆる存在者のうち、人間だけに主体性があるわけではないと考えるようになった。フランスの人類学者フィリップ・デスコラは、「人間と非人間(人間以外の存在)が類似する内面性と、異なる身体性を持つ様態」(40)をアニミズムと呼んだ。人間も、人間を取りまく自然環境も、人間でない存在者も、外見は異なるが類似した精神性をもっていると見做されていたのである(38-40)。

こうしたアニミズムの系譜をふまえ、ディキンソンの詩における自然の〈声〉を再考する上で私が注目したいのは、もう一人のアメリカの人類学者デイヴィッド・エイブラムのアニミズム論である。それは、エイブラムがディキンソンの自然詩に人類学的想像力の一端を照らし出してくれるように思われるからである⁶⁾。

4. エミリー・ディキンソンの自然詩とアニミズム

我々人間は、自然の本質を言語によって語ることができるのだろうか。言葉によって自然の本質を語るという行為自体は、どのような問題を孕んでいるのだろうか。そして、「他者」としての自然は、文学作品にどのような描かれるのだろうか。このような問いを念頭におきながら、19 世紀ア

メリカの詩人エミリー・ディキンソンの一篇の自然詩を再読したい。

ディキンソンの詩には、自然を主題にした作品が多く存在する。そして、その中に、旅人が登場する詩が僅かだが何篇か存在する。以下はその一篇、1863 年に書かれたと推測されている作品で、1 連 4 行で構成されている全 6 連 24 行の詩“Nature – the Gentlest Mother is”(「この上なく優しい母なる自然」)(FR741 / J790)である⁷⁾。「自然」が母に喩えられ、母と子のドメスティック・イメジャリーが展開されている。原文と拙訳を順に記し、詩の全体像をみてみたい——

Nature – the Gentlest Mother is,
Impatient of no Child –
The feeblest – or the Waywardest –
Her Admonition mild –

In Forest – and the Hill –
By Traveller – be heard –
Restraining Rampant Squirrel –
Or too impetuous Bird –

How fair Her Conversation –
A Summer Afternoon –
Her Household – Her Assembly –
And when the Sun go down –

Her voice among the Aisles
Incite the timid prayer
Of the minutest Cricket –
The most unworthy Flower –

When all the Children sleep –
She turns as long away
As will suffice to light Her lamps –
Then bending from the Sky –

With infinite Affection –
And infiniter Care –
Her Golden finger on Her lip –
Wills Silence – Everywhere – (Miller 372)

自然—この上なく優しい母である
どんな子どもにも辛抱強い—
どんなに弱く—どんなに我侭な子どもにも—
彼女の戒めは優しい—

森の中や—丘で—
旅人は—耳にする—
激しいリスや—
あまりにも熱烈な鳥をなだめるのを—

彼女の会話はいかに美しいか—
夏の午後—
彼女の家族—彼女の集会—
そして太陽が沈む頃—

側廊に響く彼女の声は
内気な祈りを励ます
この上なく小さなコオロギの—
この上なく価値のない花の祈りを—

子どもたちが皆眠る頃—
彼女は背を向ける

ランプに灯をともしまで—
そして空から身がかがめ—

無限の愛情と—
無限のいたわりで—
彼女の唇に当てた金色の指は—
沈黙を命じる—あらゆるところに—

この詩における「旅人」は、自然の生き物と視線を交わすこともなく、ただ黙って豊かに響き渡る自然の〈声〉を聴くだけである。この詩において、ディキンソンは、〈声〉をもつ主体である〈人間〉と沈黙する〈自然〉という二項対立的な構図を反転させ、人間を沈黙させ、自然の〈声〉を前景化している。自然を〈声のある主体〉として描くことで、さしずめ〈声〉を奪われた旅人は受動的に描かれる。そして、沈黙する「旅人」は、自然の世界に生きる動物たちの〈声〉が調和的に広がる世界に介入してきた部外者ないしは異物の様相を呈す。ここに認められるのは、人間の視覚の優位性を自然の〈声〉によって相対化するようなサウンドスケープである。

このような自然と人間の構図には、ナショナリズムと結びつく形で視覚（見ること）の価値が賞賛された 19 世紀アメリカの人間中心主義的な自然観に対する詩人の批判的な眼差しを読み取ることはできよう。それゆえ、「旅人」は中心的／主体的な存在ではなく周縁的な存在として描かれている。第 2 連 2 行目において自然の声を「聞く」という行為が受動態で提示されているが（“By Traveller – be heard.”）、その理由は以上のような文脈から解釈するのがおそらく妥当だろう。つまり、その受動態には少なからず反時代的な含みがあるのだ。

では、我々人間には、自然の本質を言語化することができず、本作品における「旅人」のように沈黙するしかないのだろうか。この問いをめぐって、私は以前に本作品を論じた拙論において、この詩における「旅人」を、人間と自然との決定的な距離を提示する特権的な存在であると論じたが、ここでは、エイブラムのアニミズムの観点から新たな解釈を付け加えることで、ディキンソンの自然詩に人類学の観点から新たな光を投げかけてみたい⁸⁾。

エイブラムに拠れば、ユダヤ教神秘主義の伝統において、〈息〉は非常に大きな意味をもっていた。それは、〈息〉というものが、自然全体に行き渡っている「神の息」ないしは「聖なる息」と考えられ、それが人間にも入り込み、「人間と神の調和は息を媒体とすることで最もうまく果たされる」からである。加えて、アルファベットによる文字文化が成立する以前には、森羅万象の活動を可能にする源として、〈空気〉・〈風〉・〈息〉は神聖なものだと考えられていた。そして、〈子音〉しか存在しなかった古代ヘブライ語において、〈母音〉には〈子音〉を動かして言葉を生み出す神聖な〈風〉の力があると考えられていた。しかし、〈母音〉は、文字文化に導入されて発話が紙の上に書き写されるようになると、その代償として、神聖な〈風〉の力を奪われることになった（エイブラム 318-20）。

そのように失われた〈母音〉の神聖な〈風〉の力と、紙の上に綴られた詩の言葉とはいかに関わるのか。ディキンソンが意図的に詩の言葉に織り交ぜている〈—〉（ダッシュ）は、本作品に限らず彼女の詩作品の顕著な特徴でもあるが、詩行を進める前に一呼吸置く詩人の息づかいのようでもあり、また、古代ヘブライ語における言葉以前の〈母音〉のごとく、詩人がぼつりぼつりと詩の言葉を紡ぐことを可能にし、詩行を次の詩行へと動かす〈風〉のようにも

思えてくる。〈—〉（ダッシュ）は音声化されることがないが、可視的な表象を与えられることで、文学テキストにも（神聖な）息遣いや呼吸の価値が内在することを可能にしているのではないか。それは、エイブラムが指摘するヘブライの伝統における「風と息の深遠な重要性」（313）に通じているようにも思える。あるいは、「不可視の空気を人間世界および人間の外部の世界に加わる深遠な神秘ととらえる感覚」（323）そのもののようにも思える。

ディキンソンは、19 世紀アメリカを代表する民主主義詩人ウォルト・ホイットマン（Walt Whitman 1819-92）と並び、その独創性が高く評価される女性詩人である。ホイットマンが、アメリカ独自の主題を自由詩に見出した一方、ディキンソンが示したアメリカ詩の独創性は、〈—〉（ダッシュ）の多用、大文字の使用、破格の詩行、意味の充満した省略などにある。ディキンソンは〈隠遁詩人〉と称されることが多い詩人だが、同時代の社会からは目を背けていたと言い難い。たとえば、国家分裂の危機に直面した南北戦争に関するディキンソンの詩を見れば、同時代作家ハーマン・メルヴィル（Herman Melville 1819-91）の場合がそうであったように、南北戦争には「詩人としての成熟」の契機があり、「南北戦争の時代がディキンソンを詩人に仕立てた」とさえ言えることもできよう（金澤 2-3）。自然に人間の精神や魂を投影するのではなく、人間中心主義を相対化するような形で自然の〈声〉を即物的に言語化する身振りは、時代の支配的言説を見つめた上でのディキンソンなりの詩的な応答であろう。ともあれ、彼女が詩の中で拠り所とした〈—〉（ダッシュ）は、言葉以前の、言葉にならない〈呼吸〉であり、詩人が慰めや救いをもとめた自然の中に見出した、森羅万象の神聖な〈空気〉のようなものかもしれない。そこには、信仰告白をする代わりに、自分の魂を守るために自然を見つめ続けた詩人ディキンソンの姿が浮かび上がってくる。

5. おわりに

本稿では、19 世紀アメリカ詩人のエミリー・ディキンソンの一篇の自然詩をとりあげ、先行研究を発展的に継承し、環境人文学の枠組みから学際的なアプローチを試みた。その際に、文学と人類学との交点に焦点をあて、これまで人類学的観点から読まれることがほとんどなかった本作品に、新たな解釈をつけ加えた。とりわけ、自然を〈声と主体〉のある存在であると捉えるアニミズムと文学との交点を補助線とし、ディキンソンの詩で謳われている自然の〈声〉や〈—〉（ダッシュ）の多用といった特異性について再考してみると、少なからずアニミズムの想像力を読み取ることができよう。

環境人文学は、「環境」という観点から、異なる分野を横断する形で、自然をめぐる価値観、思想、理念の問い直しを促す。「他者」に向き合いながら生きるとはどういうことか。「他者」とともに生きるとはどういうことなのか。この問いは、「われわれ人間がいかに生きるべきか」という問いと同一である。そして、自然と人間の関係をめぐる問題について考える際の最重要概念は「他者」である。

「他者」の〈声〉を聴くということはどういうことか。最後に、以下の一節を引用して、あえて開けた形で本稿を閉じたい——

人間には自らを主張する声があり、文字がある。だが、自然環境の「声」は誰が伝えるのか。自然の不思議な力や美しさ、そのような存在と共振する人間の精

神は、だれが、どのように語るのでしょうか。樹木が倒れ、川が汚れていくときの叫びや地球がきしむ音は、誰が伝えるのでしょうか。文学でいえば、それは詩人や小説家やネイチャーライター役目である。自らを包含する自然環境と人間はどのように向かい合うのか。自然環境をめぐる文字の想像力は歴史的にどのように変化してきたのか。アジアや欧米独自の自然観なるものが現代において果たして存在し得るのか。自然環境とのダイアローグを試みながら、人間はいかに生きるべきか、どのように自己を理解すべきか——。(山里 1)

注

※本論文は、MLA スタイルに準拠し、本学紀要の雛形を使用する。

- 1) 『Lexicon 現代人類学』所収の結城正美「環境人文学」を参照。
- 2) 結城「環境人文学の現在」245-47.
- 3) 野田「自然という他者——声と主体のゆくえ」参照。
- 4) エコクリティシズムの史的詳細および詳しい動向等については例えば以下を参照。伊藤詔子「緑の文学批評——エコクリティシズムとは何か」；巴山岳人「『エコクリティシズム／環境批評』」；結城「エコクリティシズムをマップする」；バリー「エコ批評」；マニス「自然と沈黙——思想史の中のエコクリティシズム」。
- 5) 「マルチスピーシーズ」という概念については、たとえば奥野克己「マルチスピーシーズ民族誌」を参照。奥野によれば、人類学は議論の対象を、文化表象から「動植物やモノなどを含む自然と人間が絡まりあって生み出す世界」をめぐる議論へと方向転換し、「人間を超えたところから人間について語る学問へと生長を遂げつつある」という。マルチスピーシーズ民族誌とは、その中心に位置し、「異種間の創発的な出会いを取り上げ、人類学を、人間を超えた領域へと拡張しようとする」ものである(奥野 54)。
- 6) 近年において、ディキンソンの詩をマルチスピーシーズの観点から論じた鋭意な論考として、Yamamoto Yohei の“‘Nature’s Dining Room’: Emily Dickinson’s Multispecies Imagination.”がある。
- 7) 本稿におけるディキンソンの詩作品の引用はミラー版に拠るが、フランクリン版とジョンソン版の作品番号を併記する。日本語は全て拙訳であるが、訳出の際には、朝比奈緑・下村伸子・武田雅子編訳『〈ミラー版〉エミリー・ディキンソン詩集』および新倉俊一監訳、東雄一郎・小泉由美子・江田孝臣・朝比奈緑訳『完訳エミリー・ディキンソン詩集』を参照した。なお、第1連3行目“Waywardest”という語の頭文字は、ジョンソン版およびフランクリン版では小文字である点異なる。
- 8) 本作品における「旅人」をめぐる議論の詳細は、関根全宏(31-33)を参照。

引用文献

- Dickinson, Emily. *Emily Dickinson’s Poems: As She Preserved Them*. Edited by Crisianne Miller. Belknap Press of Harvard UP, 2016.
- . *The Complete Poems of Emily Dickinson*. Edited by Thomas H. Johnson. Little, Brown and Company, 1961.
- Yamamoto, Yohei. “‘Nature’s Dining Room’: Emily

- Dickinson’s Multispecies Imagination.” *Studies in English Literature: Regional Branches Combined Issue*, vol. 13, 2019, pp. 79-87.
- 朝比奈緑・下村伸子・武田雅子編訳『〈ミラー版〉エミリー・ディキンソン詩集』小鳥遊書房, 2021 年。
- 伊藤詔子「緑の文学批評——エコクリティシズムとは何か」『緑の文学批評——エコクリティシズム』ハロルド・フロム, ボーラ・G・アレン, ローレンス・ビュエル他著, 伊藤詔子・横田由理・吉田美津他訳, 松柏社, 1998 年, pp. 1-33.
- インゴルド, ティム『人類学とは何か』奥野克己・宮崎幸子訳, 亜紀書房, 2020 年。
- エイブラム, デヴィッド『感応の呪文——〈人間以上の世界〉における知覚と言語』結城正美訳, 水声社, 2017 年。
- 奥野克己「マルチスピーシーズ民族誌」『Lexicon 現代人類学』奥野克己・石倉敏明編, 以文社, 2018 年, pp. 54-57.
- 奥野克己・近藤祉秋・ナターシャ・ファイン編『モア・ザン・ヒューマン——マルチスピーシーズ人類学と環境人文学』以文社, 2021 年。
- 小谷一明・巴山岳人・結城正美・豊里真弓・喜納育江編『文学から環境を考える エコクリティシズムガイドブック』勉誠出版, 2014 年。
- 金澤淳子『エミリー・ディキンソンの南北戦争』音羽書房鶴見書店, 2021 年。
- 関根全宏「沈黙の「旅人」——エミリー・ディキンソンの自然詩への一考察」『立教レビュー』立教大学文学部英米文学専修, 第 40 号, 2011 年, pp. 27-37.
- 豊里真弓「環境人文学」『文学から環境を考える エコクリティシズムガイドブック』小谷一明・巴山岳人・結城正美・豊里真弓・喜納育江編, 勉誠出版, 2014 年, pp. 275-76.
- 新倉俊一監訳, 東雄一郎・小泉由美子・江田孝臣・朝比奈緑訳『完訳エミリー・ディキンソン詩集』金星堂, 2019 年。
- 野田研一「自然という他者——声と主体のゆくえ」『環境という視座——日本文学とエコクリティシズム』渡辺憲司・野田研一・小峰和明・ハルオ・シラネ編, 勉誠出版, 2011 年, pp. 4-12.
- 野田研一・赤坂憲雄『フィールド科学の入り口 文学の環境を探る』野田研一・赤坂憲雄編, 玉川大学出版, 2020 年, pp. 5-52.
- 野田研一・奥野克己『鳥と人間をめぐる思考——環境文学と人類学の対話』勉誠出版, 2016 年。
- 野田研一・山本洋平・森田系太郎編『環境人文学 I 文化のなかの自然』勉誠出版, 2017 年。
- 『環境人文学 II 他者としての自然』勉誠出版, 2017 年。
- 巴山岳人「エコクリティシズム／環境批評」『文学から環境を考える エコクリティシズムガイドブック』小谷一明・巴山岳人・結城正美・豊里真弓・喜納育江編, 勉誠出版, 2014 年, pp. 265-66.
- バリー, ピーター「エコ批評」『文学理論講義』高橋和久監訳, ミネルヴァ書房, 2014 年, pp. 295-324.
- ビュエル, ローレンス, ウルズラ・K・ハイザ, カレン・ソーンバー「文学と環境」森田系太郎監訳『文学から環境を考える エコクリティシズムガイドブック』小谷一明・巴山岳人・結城正美・豊里真弓・喜納育江編, 勉誠出版, 2014 年, pp. 193-257.
- マニス, クリストファー「自然と沈黙——思想史の中のエコクリティシズム」城戸光世訳『緑の文学批評——エコ

クリティシズム』ハロルド・フロム，ポーラ・G・アレン，ローレンス・ビュエル他著，伊藤詔子・横田由理・吉田美津他訳，松柏社，1998年，35-62頁。
山里勝己「はじめに」『自然と文学のダイアローグ 都市・田園・野生』山里勝己・高田賢一・野田研一・高橋勤・スコット・スロヴィック編，彩流社，2004年，pp. 1-5.
山本洋平「はじめに」『環境人文学Ⅱ 他者としての自然』野田研一・山本洋平・森田系太郎編，勉誠出版，2017年，pp. i-vii.

結城正美「エコクリティシズムをマップする」『水声通信』第33号，2010年，pp. 86-98.
——「環境人文学」『Lexicon 現代人類学』奥野克己・石倉敏明編，以文社，2018年，pp. 200-203.
——「環境人文学の現在」『環境人文学Ⅱ 他者としての自然』野田研一・山本洋平・森田系太郎編，勉誠出版，2017年，pp. 235-48.